

交錯するへ 社会主義へ

—— 中條百合子「ズラかった信吉」論 ——

池田啓悟

はじめに

約三年間の滞在を終え、一九三〇年十一月に中條百合子（後の宮本百合子）はロシア文学者でパートナーだった湯浅芳子とともにソビエト社会主義共和国連邦より帰国した。当時唯一の社会主義国ソ連との接触は、彼女にとって決定的な意味を持っていた。「改造」に一九三一年六月号から九月号まで連載された「ズラかった信吉」は、××林業株式会社の現場人夫としてシベリアに渡った信吉が、そこでソビエト同盟に興味をもち、現場から抜け出しモスクワに向い、途中知り合った李という知識人らしき青年の助けで職と住むところを得て、日々の生活の中で社会主義を学んでいくという話なのだが、百合子はこれ以降社会主義に触れて成長する人間というテーマを繰り返し取り上げることになる。この作品より二〇年近くの時を経て代表作「伸子」の続編として書かれた「二つの庭」「道標」は言うに及ばず、「舗道」（婦人之友）一九三二年（四月）ではミサ子が

会社の同僚の柳と接触することによって徐々に階級意識へと目覚めていくし、「小説の一家」（文芸）一九三四年（一月）ではプロレタリア文化団体の仕事に従事する勉に対し、その父母が息子の活動に理解を示すようになる様が描かれている。「雑踏」（中央公論）一九三七年（一月）「海流」（文芸春秋）一九三七年（八月）は、「二つの庭」のプレテクストという一面をもった作品であるが、そこでは「二つの庭」で描かれた百合子の実生活での母との関係をもとにしながら、百合子とは違った経歴の主人公宏子を中心に様々な人物が社会主義思想とかかわりながら描かれている。「雑踏」「海流」はさらに「道づれ」（文芸）一九三七年（十一月）という続編が書かれるものの、完成をみることはなかった。

このように、「社会主義への目覚め」はソ連帰国後から様々な形で生涯にわたって問い続けた重要なテーマであった。では社会主義とは百合子にとって何なのか。第一にそれは「目覚め」と関係している。目覚めとは今とは違う新しい意識への変革で

ある。それは新しい制度によつてもたらされるのだが、この意識と制度との連関を可能とする「場」として社会主義はあ
るのではないか。そして第二に、社会主義は現状を相対化し批
判するための「場」として機能している。例えば『道標』
では、ドイツと日本がよく似た欠点を持つものとしてソ連と対
比され、批判されている。最後に、「正しさ」の源泉として、百
合子の思考を拘束するものとしてある。第二の点と矛盾するよ
うだが、百合子が日本のプロレタリア文学運動に対して批判的
とも思える発言をするのはずっと後のことであり、基本的には
運動の方針に忠実であろうとした。そうした態度は社会主義へ
の信頼からきているのである。

社会主義は百合子の求めていた新しい人間関係を可能とする「
場」であり、それを実現しようとする運動や方針に忠実であろ
うとした。しかし実現のための方法・手段と求める理想との間に
齟齬があり、理想の実現に向つて方針に忠実であろうとすればす
るほど百合子は矛盾を抱え込まざるを得なかった。

だがこれは百合子一人が背負っていたものではなく、相次ぐ戦
争へと向う時代の中で、日本のプロレタリア文学運動が、あるい
はソ連が直面した矛盾でもあった。

本論では、ここまでやや抽象的に述べてきた、百合子の抱え込
んだ齟齬と矛盾について、彼女が「社会主義への目覚め」をはじ
めて取り上げた作品である「ズラかった信吉」をもとに見ていき
たい。

一、プロレタリア作家としての百合子

百合子は一九三〇年一月にソ連より帰国してからこの作品を
発表するまでの間に日本プロレタリア作家同盟に加盟し、三一年
一月には作家同盟中央委員となり、五月には第三回大会に出席し
ている。

宮本顕治は河出書房版宮本百合子全集の解説の中で、「ズラか
った信吉」は「作家同盟が方針として、産業別小説、その他、題
材を作家に割当てて小説を書かすことにし、百合子はソビエト同
盟を書くことを求められたのに応じて執筆された」と書いている。
ここで宮本が言っているのはおそらく「組織的生産」のことであ
る。「組織的生産」は作家同盟第二回大会あたりから取り上げら
れはじめ、「ナッパ」創刊号に猪野省三が「産業別小説叢書の意
義に就いて」を、百合子の帰国と同時期に山田清三郎が「組織的
生産に関して」という論文を発表している。これは当時社会主義
経済と資本主義経済の違いを計画的の有無に求める考え方があつ
た中で、作品の創作をも計画的に進めようとしたものであったが、
早くも第三回大会の報告書からはこの試みが批判の続出により方
向転換を余儀なくされた様子が読み取れる。

その第三回大会では、幹部と一般同盟員の間で対立がおき、
役員選出を行うことが出来なかった。やがて作家同盟の解散へ
とつながる作家同盟内の亀裂の萌芽がこのときに姿をあらわし
ていた。

この大会の模様を百合子は「中央公論」七月号に文芸時評として発表している。ところがそこではこうした混乱が一切描かれていない。おそらく、これには発表されたメディアが一般商業雑誌だったことが関係している。当時、作家同盟の指導部は同盟内で解決を見えない問題を外部のメディアで語ることを禁じていた。しかしそれを守るかどうかは作家次第であり、現に林房雄を筆頭に外部で批判を展開するものはいた。文芸時評をすべて大会の報告でうめたこととあわせ、混乱を意図的に脱落させたことは、百合子がいかに作家同盟の方針に忠実であらうとしたかの証拠と見ることが出来る。

では、その百合子は、創作においてどのように作家同盟の方針に応えようとしたのか。

二、作品の舞台とナツプの方針

信吉がソ連へ行くきっかけとなった××林業株式会社というのは、おそらく露領林業株式会社をモデルにしていると考えられる。革命の混乱のなか、それまで極東地域で活動していた日本の林業関係企業はいったん引き上げることになった。沿海州森林利権に関して一九二四年一〇月から日本側代表者成田忠正がハバロフスクでソ連側と交渉していたが、日ソ基本条約の直前に森林利権を日本人名義でも許可するという提議があった。日本の沿海州関係企業はただちにこれに対応、大倉組門野重九郎を組合長とする

「露領林業組合」を組織し、交渉にあたった。日露間の林業関係を研究している萩野敏雄は、「組合事務所を大倉組本社ビルとしたのは、政商財閥である大倉組を拠点とし、国策会社である東洋拓殖の実質的指導のもとに、交渉を国策の基本線に即した形で進めんとしたためとみられる」と指摘している。

交渉は難航したが、一九二七年二月一八日ようやく「極東森林利権契約」が調印された。これにともなって「露領林業組合」は単一の新会社「露領林業株式会社」を創立する。その株主の中には東洋拓殖も名を連ねていた。

交渉が難航したのは、ソ連政府が送金及び両替機関をソ連国立銀行に限定するとの提議をしたためであった。第一次大戦から革命による混乱をへて、ルーブルは大幅に下落していた。ソ連は一九二一年末あたりからいわゆるネップ期に入り、健全財政の確立と安定通貨の創出が重要な政策課題となっていた。そこで、利権者の資金をソ連国立銀行経由としルーブル相場にかかわらず固定相場で両替させようとしたのである。結局この件は朝鮮銀行ウラジオストク支店による送金を認めることで落着いた。

「一九三二年に於けるナツプの方針書」には「かくのごとき恐慌の進展は（略）資本主義諸国をして、×争にその解決を求めることをますます痛切ならしめ（略）また同時に（略）ソヴェート同盟への共同攻撃の事業を推し進め（略）北洋漁業権の確保の問題、鮮銀支店の問題を中心に、資本家自身の利益を帝国権益の名を以っておほひあたかも国民全般の利益であるかのごとき正義の

言辭を弄して」と書かれている。これは作品冒頭近くⅠの二で「儲けるすき間のなくなった資本家が、先ず朝鮮をしゃぶり抜いて満州や沿海州へ侵略し、ひと当てやろうとしていることは知らない者のない歴史的事実だ。(略) 大きいところでは(略)さも日本の大衆に直接利害のあることみたいな体裁で騒ぎたてた露領漁業組合」とほぼそのままなぞられている。

「ズラかった信吉」は四章からなっているのだが、各章の二か二に現状の説明が述べられている。それは語り手が直接語ったり、あるいは作中人物が述べたり、または「プラウダ」に掲載された論文という形をとったりと様々な形をとっているが、必ず日本なりソ連なりの現状が語られた上で信吉の具体的な状況にうつっていく。こうした書き方は百合子の作品の中でも「ズラかった信吉」以外にあまり見られないが、これは先ほど引用したナツプの方針書、あるいはその方針書が下敷きになっているコミンテルンのテーゼでよく見られた形式であった。

鶴見俊輔は「現象から出発せず、本質から出発して現象の段階においてくるという方式が、今日までの日本共産党に特徴的な考え方」だと指摘しているが、ナツプ方針書などにみられるこの構成は、こうした思考法に基づいている。なぜなら現状の分析は、現実起こっている現象の分析にもとづいていてのではなく、一段階革命か二段階革命かのぶれに見られるように、「本質」とされた理念から導き出されたものであった。つまり「現状の分析」とは理論から導き出される「本質」の別名に他ならず、冒頭に置

かれた「本質」から方針がたてられているのであった。

百合子がナツプ方針書の構成を意識的に踏襲したのかはわからない。しかしこの方針書に描かれた世界観に基づいて「ズラかった信吉」を描こうとしたことは間違いない。ナツプ方針書に示された世界観を、どのように作品に具体化するか。それがプロレタリア作家としての百合子の課題であった。

三、日記の中のソ連、評論の中のソ連

日記や旅行記とつきあわせてみると、この作品は百合子自身が三年間のソビエト滞在の間に見聞きしたことをもとに書かれていることがわかる。後で詳述するが、これらは今まで言われてきたように作品の中でただ紹介されているだけではない。

作中に散見する食糧不足について、日記で確認すると、「食料品を売るコムナール[国営の食堂兼食料品店]で、赤葡萄酒をかう。パンも買う。リング。夜、秋田さん達来て、一緒にその葡萄酒をのんだ」(一九二八年一月二日)と当初はそうでもなさそうだが、すぐに「今年の作がわるいと大分CCCP[ソ連邦]閉口らしい」(同年五月二九日)と状況が悪くなっていく。あとは「モスクワに白粉がないと云って細君こまってる。飢餓以来の由。＼＼も食堂でパンを見たら、白くない。茶色をして居た由」(同年五月三一日)、「パン一人につき一フントだけ買える由」(一九二九年四月四日)、「牛乳来ず」(一九三〇年二月八日)、「牛乳

なし。この頃、食糧がなかなかひっぱくして来た」(同年二月九日)、「コムナールの食物のところ空々で空の木箱が置いてある」(同年三月十日)、「久しぶりのモスクワ。三週間の間にプロダクス(食料品)の点更に不便になった」(同年八月四日)、「コムナールにブドーが出ている。野菜類も出た。人參、花やサイ、キャベジ等。・トマトは非常に少い」(同年八月七日)と多少持ち直したような記述も見られるが、基本的には逼迫した状態が続いていたようだ。

信吉が働くことになる工場である日、牛乳の支給量がコップ半分に減らされ、それに対して「初めてだぜこの工場で」といわれている。日記の記述と照らし合わせると、牛乳が手に入らなくなるのは一九三〇年の二月あたりで、作品の舞台が夏ごろであるのと一致しない。作品に取り込まれる際に再構成されているのだ。そしてそれは、あとで詳述するように連載の最後となった回に描かれた「食糧配給監督の突撃隊」の結成討論会がクライマックスになるように構成されているのである。

この「食糧配給監督の突撃隊」については、「時事新報」一九三〇年十一月十三日、十四日に掲載された「露西亜の実生活」という談話の中で「今年の秋の初め、野菜が非常に配給困難に陥った、その理由は消費組合内の反革命的分子の策動と、運輸状態が悪かったために起こったことである。そう云う場合に実際活動をして、消費組合の監督運輸方面を活潑にさせたものは衝撃隊と、軽騎隊と、婦人労働者の中から選ばれた代表者の仕事であった、

勿論凡ての団体は男女の労働者動人から成立っている」と語っており、食糧不足が反革命的分子や運輸状態から説明されている点が作品と酷似している事などから、このエピソードがもとなっていると考えられる。ただ日記にそれらしい記述はなく、書き記さなかった可能性もあるが、おそらく百合子が実際に見たのではなく、新聞雑誌などの記事から得た情報なのではないだろうか。

また、一九二八年六月一日の日記に共産党婦人部の「デレカード」(代議員)集会に参加したときの記録があり、そこに「皆が何かいうと、ソヴェート・ヴラスチ」(ソビエト権力)が与えないうという。然し、どこの他の国に我々が持つだけ権利を持つ女があるか。プラービリノ! プラービリノ!「そうだ! そうだ!」という声盛なり」という記述がある。文学関係以外で討論の様子が書かれているのはほぼこれだけで、こうした実際に目にした討論の模様もこの場面には反映されているだろう。

このように自らの経験を作品化するのは『貧しき人々の群れ』以来の百合子の方法であった。しかし「ズラかった信吉」では、後の「広場」や『道標』とは異なり、自伝的な作品としてではなく「信吉」という人物を仮構した。だがこの設定は、作品によって百合子が伝えようとしたものとずれを生じているように思える。

信吉はモスクワにおいては主に観察者の立場にいる。初めに紹介された「張り切った生活をも追はたから眺めてるような」煉瓦碎きの仕事から農具を作る工場に移ったとき、「工場全体の仕事と抜きさしならず結びついている」——計画的に生産を進めるソ

連において工場全体と結びつくことは社会全体と結びつくことを意味しているだろう——この仕事に満足を感じるのだが、やはり信吉はそこで起こる出来事にとって傍観者でしかない。

例えば証人として裁判所に呼び出されたとき、裁判の過程を通してソ連の養育費の制度について知る。百合子は養育費や堕胎、同一労働に対する男女同一賃金、産前産後の有給休暇、無料産院に託児所などはソ連滞在中に何度も足を運び、調べ、日記に書き付けている。帰国後に書かれたソ連紹介でも繰り返し取り上げてきた。ソ連で読んだ林房雄の「コロンタイ」を取り上げた論文（『新恋愛の道』「中央公論」一九二八年七月号）を「センチメンタルでない新しき恋をセンチメンタルな調子でかいてある」と批判した彼女にとって、制度としてどのような保証がされているか、それがどのように人々の意識に反映されているかは切実な問題だったろう。作品後半でアクリーナという女性から売春をもちかけられたとき、「養育費払う金もねえもん」といって断るのは、単に断る口実のように見せながら、その実そうした制度が人に働きかけていることを描こうとしたのだろう。だがうまくいっているとはいえない。それはソ連の堕胎制度を評価しながらも「男が性的交渉に於いて具体的な責任をもたぬ。アボルトすりゃいいじゃないか」と書いた風な傾（一九三〇年五月三十日、アボルトは堕胎のこと）と書き付けなければならなかった百合子自身が、意識の変革は単純には行かないことをよく知っていたからだろう。現実にはうまくいかないものを信吉という人物に理想的に形象化した

が、この回の出来を百合子は日記に「八月の信吉がベシヤンコで閉口した」（一九三二年八月四日）と書かずにはいられなかった。「理想化」は「仲子」に顕著に見られる百合子の方法のひとつだが、三〇年代の作品では影をひそめる。それが再びみられるようになるのは戦後の作品においてである。

後に百合子は日記に「書きたいのは小説だ。ソヴェートのは最小限にして、小説の勉強だ。」最近急に自分の心持がかわって来た。小説が書けるようになって来た。沢山紹介を書いているうちに、プロレタリア文学の面白さというものはどこにあるかわかって来たのだ」（一九三一年十一月一日）と書いている。ソ連紹介をする中で百合子が獲得したものこそ、こうした社会制度を見るまなざしであった。さらに言えば、そうした制度と人間のかかわりであっただろう。

平林たい子は「この小説は多くの場合、信吉を描くことが従ってロシヤの風物を書くことが主となつてゐる」と指摘したが、この二つのどちらかに重点があったのではなく、双方のかかわりを問題としていたのだ。本多秋五は「これらの紹介文は、今日読むと、当時ソヴェートで一般に公的に、通用していた見解の紹介だろうと思える。（略）その紹介を、日本のプロレタリア文学の、当時における支配的空氣にあわせて書いたものだと思える。」とみているが、何を紹介するかの選択に、単に公的見解の紹介にとどまらぬ切実さがある。

ただし、本多の指摘も一理ある。日記と公的に発表された紹介

文にはソ連の見方に開きを確認することが出来る。日記に記されたソ連への批判や問題点の指摘は、紹介文ではほとんどみられない。あつてもそれは既に解決済みのものとして紹介されている。例えば先ほど引用した性的交渉における責任の問題は、「戦時共產主義時代に若い黨員が恋愛の自由ということを勘違いして、いろいろの誤謬を起こした（略）併しそういう点は今の若い人間はズツと進歩して健全になつており、それだけ社会状態が落付いて来たわけで、これはソヴェトが今再び建設時代に入っているはつきりした証拠である」とされている。繰り返すが、そう単純にいかないことは百合子自身がよく知っていた。それをこう書くのは、作家同盟第三回大会の紹介で混乱を一切書かなかつた態度と共通している。当時の百合子は、プロレタリア文学運動に対する厚い信頼が桎梏となつて、それ自体に批判を向けることはほとんどなかった。

だが、「ズラかつた信吉」においては評論で解決済みとされていた数多くの問題が描かれている。それらを新しい社会主義社会がどのように乗り越えていくか、それがこの作品の主題のひとつなのである。

四、対決の不在

「食糧配給監督の突撃隊」の結成へとつながる討論会が作品のクライマックスにあることは既に述べた。食料品の不足は作品の

はじめの方から描かれているが、ある日「ブラウダ」に全露共產党中央委員会書記の報告が掲載される。それによると食糧不足の原因が富農によるサボタージュと運輸や消費組合がうまく機能していないことにあるとされていた。信吉は区の代議員を務めている知り合いから聞いた、別の工場では消費組合監督の突撃隊を結成したという話を同僚にする。そこから信吉の働いている「鋳」工場でも消費組合監督の突撃隊を組織しようという話になる。すぐに休憩時間を利用して、討論の場がもたれる。

コムソモレーツ（青年共産主義同盟員）のヤーシャが、まず口火を切つて「ブラウダ」に載つた報告を説明する。このときの聴衆の反応は醒めたものだつた。「きき飽きた、熱している喋りてとハグれた気分がスーッとみんなの間に流れる」のを信吉は感じる。これに対しヤーシャは、過去の経験に訴えかける。「われわれは一九二八年の官僚主義撲滅のとき、どんな光輝ある活動をしたか！ 覚えているか？ みんな！ チョビ髯の工場委員会書記が、どんなザマしてオツ払われたか、覚えているか？」聴衆から笑いを引き出したヤーシャは、「ソヴェトのプロレタリアートが、階級的自発性で動き出すときが、今またわれわれの前に来ている。（略）闘わなくちゃならねえ！ 大衆的に、ポリシエビキ的に置かれていいる情勢を批判しなけりやならないときなんだ！」とたたみかける。

肯定的な反応が返ってくる中、「大きな髯をもつた男」が反論する。

兄弟！ 俺はこういう疑問をもってるんだ。長いこともってるんだ。われわれ生産に従事する労働者に食糧が足りねえとき、何故国家保安部の消費組合だけはフンタンに物をもっているのか？

何故外国人だけ、特別の切符でしこたまものを食うことが許されているのか？——俺はこれに答えて貰いてんだ！

この「大きな髯をもった男」は他の場面には登場しない。だがその主張するところは作品のいたるところでみられるものだ。信吉自身、モスクワに着いた当初に「立派な赤糸入りの車にのった男」と「乞食」を見、また「案外暮しは楽じゃねえ」ことからソ連にもやはり「社会の段々というもの」、すなわち階級が「目に見えるところにあ」り、「自分がそのてっぺんにいる身分だとは思えない」と感じていた。また「外国人」に関しては、討論の行われる直前に、次のようなエピソードが挿入されている。ヤーシャの妹が働いている煙草工場に、外国人が三人工場委員の女性に案内されて見学に来た。その外国人をつかまえてニーナという婦人労働者が、私達は餓えているんだと叫び、工場委員会の女性に怒鳴りつけられた。ヤーシャからこの話を聞いた面々は議論を始め、いったんは「プロレタリアとして云うべきことと云うべき場所があるのを知られなくっちゃならねえ！」というところに落ち着きかける。そこにグルズスキーが「購買組合の棚は空だっている事實は、どうするよ」と口を挟む。これに誰かが「食い物は確か

につめてる。その代り工業生産はわれわれのところ、ソヴェトで一年に二八パーセントも殖えてる。これがわれわれの事實だ！」と反論、最後に誰かが「どっち道、その女工場委員はホントのボルシェビキじゃなかったんだ。何故逃げたんだ？ 外国人つれて。——云わしいいんだ。大衆の口をふさぐことは許されてねえ。事實で証明すりゃいいんだ」と言ったところでこの場面は終る。

ここでのやりとりが興味深いのは、ここで語られている態度が百合子自身の矛盾した態度と共通する点である。「プロレタリアとして云うべきことと云うべき場所がある」というのは、まさに百合子自身が文芸時評その他で取ってきた態度である。そしてそれは作家同盟の方針でもある。ところがここでは大衆の口をふさぐのはボルシェビキではない、とされている。事實を隠すのではなく、その事實を超える事實でもって応えなければならない、というのだ。評論ではあまり前面には押し出さなかった、ソ連に渦巻く不満を取り入れた小説の創作態度は、これに近い。これらはどちらが優位に立つということもなく並存している。突き詰めれば対立せざるを得ない二つの見解は、しかし作品の中で闘わされることはない。対決が生まれない理由のひとつは、批判すべき相手としてグルズスキーが設定されているためだろう。矛先は彼に向けられ、ぶつかり合うことは回避される。これはこの作品の特徴でもある。批判すべき対象とそれ以外はきれいに分けられ、対立とその克服を主題としながらも、もっとも深刻な対立は不在なのである。

討論会に話を戻すと、「大きな髯をもった男」に続いて、アクリーナという工場学校から来た婦人旋盤工が消費組合を批判し、さらに「四十がらみの掃除婦」マルーシャが、消費組合で釣銭を間違えられた話をする。「プロレタリアのものをプロレタリアがちよろまかす——そりゃボルシェビキのすることじゃない」そう思つて勘定を書き直してもらつたとき、売り子は邪魔くさいと悪態をついた。そこから彼女は「われわれんところで消費組合はいつもキツチリ働いているとは限らない」という結論を導き出す。

「管理がうまく行つてねえんだ!」「政府だつて、うまく管理してるとは云えねえ」と騒ぎ始める中、アクリーナと同じく工場学校出身の婦人旋盤工オーリヤが発言する。彼女は「われわれ×××プロレタリアートはそれで、今誰かが叫ぶたように、政府の管理がどうこうつていうことは云えない」と主張する。「フラウダ」に載つた全露共産党中央委員会書記の報告にもつづいて食糧難の原因を富農による売却サボタージュにあると考える彼女は、聴衆に向かつて「何故富農やその手先が、作物の活潑な流通を妨げるのか?」と問いかけ、自らこう答える。「奴等」、すなわち富農とその手先は「ソヴェトを狙う資本主義国のブルジョアと同じ」であり、「奴等の利益のために(略)イガミ合いをさせようとし」、「自分たちのブルジョア根性で、(略)食糧配給を混乱させれば、ソヴェト大衆は不平をもちはじめ、(略)自分のソヴェト権力に向かつて反抗するだろうと、それを待てる」のだという。それを受けてヤーシヤは「食料困難が、五カ年計画さ

えやつちまえばひとりでに消えるもんだらうぐらゐに考えて放つておくのは、まるで非階級的な日和見主義だ」とし、「階級のために、ポリシェビキは闘おう」と呼びかける。

こうして消費組合監督突撃隊が結成される。この討論の後、時間は夏の終わりにうつり、突撃隊の活躍は回想として語られる。この作品では突撃隊の活動そのものよりも、その結成までの過程に焦点が当てられているのだ。

食糧の問題は、別の工場で消費組合監督の突撃隊が出来たという話を信吉がしたとき、誰かが「あすこはドガイ女が多いんだ」と言つたように、女性と結びつけられていた。それは「女性の問題」という閉い込まれた形での結びつきであつた。討論の場はこうした区分を突き破り、この問題こそ階級的自発性を發揮すべき問題なのだとされる。そしてそう発言したのが婦人旋盤工のオーリヤであり、また議論の方向を変えたのは掃除婦のマルーシャの発言であつた。

作品の中で、信吉の感想を通じて労働の質の違いが語られている。彼が最初に取り掛かつた煉瓦砕きの仕事は、臨時だという意識があつて仲間に対しても仕事に対しても冷淡であつたが、工場での労働はそれと違い、一体感があるという。社会的な有用性の違いにより、そこに従事する人間の意識の違いが語られている。それは信吉の宿主の元工場主で今は許可露店商人をやり、酒の密売でつかまつたグリーゼル、家持のグルズスキーらの反ソ的態度と対応しており、やや公式的な描き方となつてゐる。

ところがマルーシャはこうした公式からは外れたところにいる。彼女は工場労働者ではなく、工場で働く掃除婦なのである。彼女だけではない。信吉を誘惑したアクリーナは、優等生のオーリヤと同じ工場学校出で、その性格や行動を説明するための社会的背景は作品の中にない。グリーゼルの愛人だったエレナは、「この女がこんな微笑みを洩らすこともあるかと思う清らかな微笑み」を浮かべながら、「ねえ……何故人間って知らないことは何でも、いいことでもおっかながるものなんだろう」とつぶやく。それは作品の中では彼女自身が子どもを託児所に預けることに不安を感じていたことを指しているが、当然読者に対する呼びかけでもある。

こうした女性たちの描き方が比較的柔軟であったのは、当時のプロレタリア文学運動や共産党の指針に女性が明確に位置づけられてはいなかったからではないだろうか。共産党に婦人部が置かれたのはだいたい一九三一年三月から翌年の十月ごろまでだという。三一年政治テーゼ草案にも「婦人運動について」という項目があり、おそらくこのテーゼにもとづいてコップに婦人協議会が作られ、その責任者に百合子が選ばれているが、それでも例えば農民文学などに比べると女性が前面に出ることはなかった。このようなプロレタリア文学運動内の軽視が、逆説的に柔軟性を与えているのである。

信吉は「口で云えない伸縮自在な、共通な力」「見えない力」「光みにたいに力よく漲って、みんなを引っぱっているもの」を感じる。これを「プロレタリアートの階級の力」と表現している

のだが、これがジェンダーを超え、各々の立場を超え、また国籍を超えて、全体をひとつにまとめあげる力であり、討議の場面で描こうとしたのは、こうした力の生成であったと言える。ところがこうした力は、「その力もいわれもしないには来ない。力となる科学的な理論があるからだ。（略）指導理論を、みんなが腹にいれているからこそ、ジリリ、ジリリとブルジョアどもを地球の上から押しつけ出したんだ」とされている。作品そのものは当時の指導理論に収まらない残余をもちながら、いったんそれが説明されると、理論が上位におかれるのである。統治する側とされる側の幸福な一体化は、実際にはする側／される側の権力関係はそのままに、される側がする側へと従属しそれを隠蔽することにはならない。ここでもまた対立は不在なのである。

五、植民地の影

信吉はモスクワに到着する前、シベリア鉄道を走る汽車の中で、ロシア語にまだ慣れないため値段を聞き間違えて売り子とトラブルを起こす。そこに偶然居合わせて信吉を助けたのが李という「朝鮮人」知識人だったのだが、当初信吉は李が「朝鮮人」だと気づかない。出身を聞いてはじめてそれと知った信吉がまず思い浮かべるのは、内地の「土方か飴売り」の姿、関東大震災で虐殺にかかわったと思われる叔父のことなど、植民地をめぐる暴力と排除に関する記憶である。

植民地の問題はもうひとつ、この作品の成立に深くかわつてゐる。××林業で働いていたとき、信吉は同僚の源から会社がルールの闇相場と国定相場の差額を利用して利益をあげていることを聞かされる。この作品には直接名前が挙がらないが、その舞台となつてゐたのが朝鮮銀行ウラジオストク支店、ナツプ方針書にある「鮮銀支店」である。このルールの闇取引は実際に行われていたし、それは一般にも知られてゐたようだ。

朝鮮銀行とは、朝鮮の中央銀行の地位にあつた第一国立銀行韓国総支店にかわつて設立された韓国銀行が、韓国併合により国号が変更されたことともなつて改称されたものである。第一銀行は一八七八年の釜山に支店を出した。韓国政府は自国の手による中央銀行設立を準備していたが、日韓議定書にもとづいて韓国に派遣された大蔵省の目賀田種太郎の働きかけで、第一銀行が韓国の貨幣整理を一任されるとともに中央銀行の地位を確立する。一九〇七年には第一銀行にかわつて韓国銀行が中央銀行として設立された。そして一九一一年八月一日には日本の法律に基づく「朝鮮銀行法」が施行され、韓国銀行は朝鮮銀行となつた。この朝鮮銀行と露領林業株式会社の株主のひとつであつた東洋殖産会社が朝鮮の植民地支配の拠点となつてゐた。

一九一〇年から一九一八年にかけての土地調査事業の結果、多くの「朝鮮人」が土地を失ひ移民となつた。彼／彼女らは一方で日本へと移り、信吉が見たように下層労働に従事させられることになつた。他方では極東地域や満州へと流れていつた。

信吉が李と出会つたのは偶然ではない。一九三一年にシベリア鉄道三等列車でパリに向かつた林美美子もやはり車内で出会つた朝鮮人青年の姿を書きとめてゐる。ただここでは「なつかしさ」に日本語で、ベラベラ話して来た」彼については、「仲々教養なコースをたどりつつあるらしい」としか書かれていないが、風間丈吉が一九二五年に三等列車に乗つてソ連に向つたときにも、「内乱当時自分の親を日本の軍隊に殺されたという一人の朝鮮人」と同室になつてゐる。この人は日本語を全然知らず英語を少し話したそうだが、風間たち一行の世話を焼いてくれたという。この時期さまざまな境遇をかかえた「朝鮮人」が乗り合わせており、信吉と李の出会いはそのうちのひとつなのである。

信吉が内地で見た「朝鮮人」の姿は、ひよつとしたら他国で移民として生きる信吉自身の未来の姿であつたかもしれない。そうならないのは、社会主義国ソ連が日本とは違うからである。その違いを生じさせてゐるものを描くことに作品の眼目があつたことは、既に述べた。だからこそ評論等では解決済みとされた問題があえて作品に取り上げられたのである。この解決困難な問題と向き合うことによって生じる緊張関係から導かれるものこそ、作品の言葉を使うなら「プロレタリアートの階級の力」であつたはずなのだ。だが結局、「プロレタリアートの階級の力」はそこから生じるものではなく、それを解決するものとして持ち出された。それはソ連と日本が違うのはソ連がソ連であるからというに等しい。

「ズラかった信吉」の連載が終了したのは「改造」一九三一年九月号であるが、この三一年九月一八日に起きた柳条湖事件に端を発する満州事変は、極東に新たな緊張を生む。その前後から「朝鮮人」の入国を締め出すような政策が出され、さらに一九三七年八月末には極東在住朝鮮人全員の中央アジアへの強制移住が断行される。同年の四月と七月には「ブラウダ」に日本のスパイが朝鮮人や中国人に装ってくることがあると書かれおり、「朝鮮人」が日本のスパイになるのではないかと怖れたのである。同時にソ連にいた日本人の多くも肅清される。外務省外交資料館には一九三三年に外務省に保護を求めた人物の記録がある。元は漁夫だったという違いがあるものの、年齢や経歴は重なる。社会主義に興味をもったものの、現実との落差を感じ、またソ連国籍を得て以降の待遇に不満を感じ、ゲーペーウーに反ソ煽動及び宣伝の罪で捕まって僻地に追放されることになり、大使館に助けを求めたのだ。¹⁵これらは李や信吉の未来のひとつである。それは歴史の後付によってそういえるのではなく、既に作品の中に萌芽として存在しているのである。

六、プロレタリア文学運動の中で

「ズラかった信吉」が連載されていたころ、プロレタリア文学運動においてはナツプからコップへの再編が進行しつつあった。古川莊一郎の名で蔵原惟人が「プロレタリア藝術運動の組織問題」

（「ナツプ」一九三一年六月）を発表、これを機に工場・農村の文化サークルを基盤にした組織へと動き出すことになる。しかし蔵原の主張がすんなりと通ったわけではない。窪川鶴次郎の回想では、この論文は事前に彼らのもとにまわってきたという。そこで手塚英孝らと相談し、いったんは発表を見送った。鶴次郎が問題としたのは、一つには作家達が限られた期間サークルに参加しその指導にあたることは有意義だとしても、日常的活動としてサークルの組織にかかわることは過重な負担となるということ、もう一つはサークルと各同盟との関係が曖昧であること、などだった。¹⁷

だが蔵原は、党中央部と連絡を取っていた生江健治と会合を重ね、コップの構想をかためていき、同時にコップの中に党フラクションを作る準備を進める。そのためにこの時期作家同盟員が次々と共産党に入党している。百合子の入党も一九三一年十月のことであり、こうした流れの中にあつたとみて間違いないだろう。

鹿地亘は回想の中で蔵原のこの論文について「まったく激励され、眼の前がひらけるようだった」といっている。¹⁸それは作家同盟第三回大会にあらわれたような幹部派と一般同盟員との対立を打ち破るものに見えたからだ。確かに蔵原は「プロレタリア藝術運動の組織問題」の中で、「ナツプ最近の事実を見ると、芸術運動のボルセヴィキ化ということを、（略）組織のボルセヴィキー化と誤認しているように思われる。（略）極度の統制主義、必

要以上の秘密主義、下からの意見を充分に反映させないこと、重大な問題を大衆の討議にかけないこと等はその重なる例である。(略)これは大衆団体の組織原則を無視したもので、絶対に誤りである」としている。

この主張そのものは確かに妥当だともわれるのだが、実際に進行していたのは党フラクションを通じて文化団体を党の指導下に置くことであつた。その結果、鹿地亘自身が「一切がかげで準備され、おもてにもち出されて、承認され、執行される。細目にわたつてまで、かががおもてを掌握し、干渉し、おもてには実際の決定権はない。イニシアティブの余地がなかった」というような事態に陥つたのである。鹿地はこうした結果を地下にいた宮本顕治や小林多喜二の指導のまずさに求めているのだが、林淑美はそもそも蔵原の組織論じたいが文化運動の独自性を念頭に置いたものではなく、党員獲得のツールとして位置づけられ、そのために党フラクションを体系化し党の統制化におくことにあつたと指摘している²⁰。

こうした体制は確実に不満を生んでいた。宮本顕治や小林多喜二ら地下指導部はこれをすべて右翼的偏向のあらわれとし、その克服を作家同盟員にせまつた。この流れの中で百合子が「一連の非プロレタリア的作品」(「プロレタリア文学」一九三三年一月)を書き、林房雄をはじめとする激しい反発を招く。

右翼的偏向に関する論争の中で百合子が見せた態度は、「ズラかつた信吉」の論理を現実につづせばどうなるかを如実に語って

いる。階級の力の名の下に避けられた様々な対立と百合子は向き合ねばならなかつた。彼女とその作品の中で交錯する(「社会主義」)は、こうした過程を通じて変動を続けた。そこから見えてくるのは「一本の矢」(本多秋五)「連続するリズム」(臼井吉見)として表象されたのとは異なる百合子像である。この変化の過程をたどることは、百合子が社会主義を対置させることによって撃とうとしたものが何であり、何がそれを阻んでいたかを思考することである。「社会主義」の理念がほとんど省みられなかつた現在においても、それによって百合子が闘おうとした現実とは変わらず残っているのである。

全面的な肯定でもまったく否定するのでもなく、百合子の抱え込んだ矛盾・齟齬を読み込む作業の中にこそ、今百合子の残した作品を読むことの意味があるのではないだろうか。それは社会主義の夢の挫折以降、けがれないまっつき理想を掲げることが不可能とわかつた現代において、それでも変革を志向するために必要な作業なのである。

注

(1) 宮本顕治「解説」『宮本百合子全集 第四巻』河出書房一九五一年二月一日

(2) 猪野省三「産業別小説叢書の意義に就いて」『ナッパ』一九三〇年九月号、山田清三郎「組織的生産について」『ナッパ』一九三〇年十一月号

(3) 「日本作家同盟第三回全国大会報告、方針書」「ナツプ」
一九三一年七月号

(4) 日本プロレタリア作家同盟中央委員会「ブルジョア出版に対する我々の態度はこうでなければならぬ」「戦旗」
一九三〇年六月号には「ブルジョア新聞・雑誌上に無用のゴシップをとばし、わがプロレタリアートの全運動に對して妨碍となるようなニュースや論説を発表してはならぬことは勿論である」とある。

(5) 萩野敏雄『日露國際林業關係史論』日本林業調査會
二〇〇一年八月一日、露領林業株式會社関連の記述はこの本をもとづいている。

(6) 鶴見俊輔 久野収『現代日本の思想―その五つの渦―』
岩波新書一九五六年十一月一七日

(7) 平林たい子「文芸時評」「改造」一九三二(昭和六)年九月号

(8) 本多秋五「宮本百合子——人と作品」「宮本百合子研究」新潮社一九五七年四月一五日

(9) 中條百合子「ソヴェト・ロシアの素顔」「アサヒグラフ」一九三一年一月一〜二八日

(10) 犬丸義一 山本千恵「『婦人戦旗』・『働く婦人』解説・解題」『復刻版『婦人戦旗』・『働く婦人』別巻』戦旗復刻刊行会一九八〇年三月三十一日

(11) 外務省外交資料館には、ウラジオストクの領事館を

通じて「森」という人物が林業組合の「梅浦」という人物に送った「右電文中ニ「留」価値ノ下落ニ依リテ云々ノ文句アリ万一露国官憲カ之ニ依リ吾々カ兩國相場ヲ利用シツツアリト解スル場合ハ由々敷大問題ヲ惹起スル虞アリ将来換算率等ニ関スル文句ハ絶対ニ使用セサル様係ノ者ニ御伝ヲ請フ」という文章が残されている。閣取引は「出々敷大問題ヲ惹起スル」可能性のある違反なのであり、その隠蔽に神経を尖らせる現場と、いまひとつそのことに鈍い本社との意識の開きがうかがわれる。それは次の、「留ノ公定相場ヲ考慮セス鮮銀相場ノミヲ見テ門ヲ送ラレテモ貴方推定通り一度ニ留全額受取り出来ヌ貴方送金額ヲ推算スルニ毎時当地鮮銀相場ヨリ低価ナリ当方ハ鮮銀ニ依リ留ヲ交換スル外無キハ絶対ノ事実ナリ此ノ事実ニ基カサル数字ハ全ク無意味ノ仮定ナリ從テ其ノ相場ノ差額ダケ常ニ留ノ不足ヲ来シツツアルコトヲ御承知請フ」という電信にもあらわれている。アジア歴史資料センター「帝國の對露利權問題關係雜件 森林關係」(E・4・2・2)(外務省外交資料館)、また例えば読売新聞一九三〇年八月一四日付の朝刊には「ループル問題露国積極的に出る」の見出しでソ連の調査の手が浦塩支店に入ったことを伝える記事の中に、「鮮銀の手を通じて安いループル貨を以て對露支払をしていた北洋漁業、北樺太石炭、石油業などは早速大打撃を受ける」という記

述が見える。閣取引は公然の秘密だったようだ。

- (12) 朝鮮銀行史研究会『朝鮮銀行史』東洋経済新報社一九八七年二月一〇日、多田井喜生『朝鮮銀行 ある円通貨圏の興亡』PHP新書 二〇〇二年三月一日を参照した

- (13) 林芙美子『三等旅行記』改造社一九三三年、引用は三笠文庫一九五八年五月二八日

- (14) 風間丈吉『非常時』共産党』三一書房一九七六年八月三一日

- (15) 和田春樹『ロシア領極東の朝鮮人 一九六三—一九三七』『社会科学研究』第四〇巻第六号一九八九年、岡奈津子『ロシア極東の朝鮮人 —ソビエト民族政策と強制移住—』『スラヴ研究』四五号 一九九八年三月を参考にした。

- (16) アジア歴史資料センター『在外邦人保護並取縮関係雑件 蘇連邦ノ部』(K・三・三・〇・四・二)

- (17) 窪川鶴次郎『わが文學への道』『文化運動外史關いのあと』民主評論社一九四八年十月三〇日

- (18) 鹿地亘『自伝的な文学史』三一書房一九五九年十一月二一日

- (19) 同右

- (20) 林淑美『中野重治連続する転向』八木書店一九九八年一月二二日

※日記の引用は『新版宮本百合子全集』(新日本出版社二〇〇〇年十一月—二〇〇四年一月)に拠った。その他は初出に拠り、旧字は新字に改め、ルビなどを適宜省略した。

(いけだ・けいこ) 本学大学院博士後期課程